



腐蝕の闇
innocent

Photo by jinwon198308 on pixabay / powered by かんたん表紙メーカー

目次

| | |
|-----------------------|----------|
| innocent | 1 |
|-----------------------|----------|

innocent

二年ぶりに御都部邸を訪れた僕は、その変わり果てた様に息を飲み、応接間の柱時計が午後三時を告げる鐘の音を聞きながら、勧められた椅子へと腰を降ろした。

「ご足労頂いて、申し訳ないね……」

向かい側の椅子へ腰かけたこの邸宅の主は、部屋の中だと言うのに黒いサングラスを掛け、その表情は口許でしか計り知ることが出来ず、室内の埃っぽい空気や何となく饅えた臭いに、少しばかり不快を胸に広げた僕は、

——早いとお暇しよう、預けてしまった外套に後悔を思い併せた。

「お父上の三回忌にも伺えなくて……」

深々と下げた頭を仲々上げない御都部に恐縮した僕は、『気にしないでください』と向け、

「色々とお忙しいみたいで……」

厭味に思われないよう、控え目な笑顔を向けた。

「いや——医院の方は、親父が死んでからは人任せなんだけどね……私用が立て込んでいたものだから……」

口唇を歪めながら答えた御都部は急に立上り、チラ——と、奥の部屋への扉を窺い、僅かに開いた扉を押し戻した。

「この間君に会った後、雑誌でお父上を偲ぶ記事を拝見してね。亡くなられてからそんなに経つんだなぁと——」

背中を向けた御都部は、僕のために珈琲を淹れてくれているようで、その背中へ『お構いなく』と告げた僕は、御都部のシャツの襟が、内側へ折れ曲がっていることに気付いた。

——慌てて身に着けた……ってことか。

玄関でチャイムを鳴らした際、仲々応答しなかったことや、奥の部屋で誰かが息を殺し、こちらの様子を窺っているのでは？　と言う気配に、

——あの噂は、まんざらデマでも無いのかな？

大学時代の友人から聞いた噂話を思い出した。

研修医の頃から、親の七光りで注目を浴びていたこの、美貌の形成外科医は、莫大な遺産を殆ど一人で継いだのを良いことに、天職を投げ出し『色狂い』をしている……と、僕は小耳に挟んだのだが……

差し出された珈琲カップに頭を下げた僕は、

「三回忌も済ませましたので、父の遺言通り生まれ故郷の方へ墓を移しました」

墓を移したフランスへ、僕も何度か足を運んでいる旨伝えると、フランス留学の長かった御都部は、懐かしむように頬を緩めながら、

「お父上も、お喜びになっているだろうね」

小さく二度頷き、珈琲カップへ伸ばした僕の左手を指差すと、

「君も——まだ独りなんだね」

黒いサングラスの奥で、昔と変わらぬであろうあの涼しげな瞳を、煌と光らせたように僕は感じ、小さく縦に首を振ると、手を引っ込めてしまった。

御都部と僕は、大学では先輩後輩の間柄だったが、お互いに開業医の父親を持ち、幼くして母親を亡くした独りっ子——と言う、境遇の良く似た者同士で、言わば家族の付き合いをして来たのだ。

しかし、二年前に御都部の父親が急逝した後には、何となく疎遠になってしまっていた。

——そうじゃないな……

何となく疎遠ではなく、僕は明らかに御都部を避けていたのだ。

当時、大学では余り顔を合わせることも無かったのだが、ひよんな時出交わしたりすると、大袈裟に僕を抱き締めた御都部は、外国人がよくそうするように、僕の頬へ口唇を寄せて来たものだ。誰にでもそうする訳では無く、それは僕にだけ示す態度で、

——男色の気でもあるんじゃないだろうか？

御都部が僕に特別な感情を持っているのでは？ と、その都度詮索したものだ。

御都部は、医学の才能だけではなく、美貌も兼ね備えた素晴らしい男であるが、人としては、何か大切なものが欠落してしまってる風なこの男に、僕はどうしても好意を持たず、頬に接吻^{くちづ}けされる時の、吸われる感触に、只々嫌悪を募らせるだけだった。

視線の先で珈琲を啜る御都部は、あの頃とそんなに変わってないようだった。少し痩せて、顔色が悪くなってしまった……そのくらいの変化だと思うのだが——

——この部屋……

ぐるりと辺りを見回した僕は、真正面で煙草を銜えた男の父親がまだ健在だった頃の、気品に溢れたこの部屋の雰囲気^{ふんいき}を脳裏に甦らせた。

室内に置かれた調度品は、当時と同じ物なのだが、全体に煤けたような、見た者を厭な気分^{いと}にさせるような……表現する^{あらわ}としたら、悪意があるような……そんな側面を見せていた。

——あ……まだ飾ってる……

部屋の北側に当たる壁に、当時のままに飾られた『僕の写真』を見つけ、歯痒い気分と微かな嫌悪^{いと}を覚え、落ち着かない気分を紛らわせようと珈琲を一口啜った僕は、口にした珈琲の苦さに顔を歪めてしまった。何だかこの飲み物にも『悪意』が潜んででもいるように思えた。

人を呼びつけて置いて、仲々要件を切り出さない御都部に焦れて来た僕は、旨くもない珈琲をもう一口啜り、

「——で……お話と言うのは？」

早いところ退散させて貰おうと、間合いも考えずに口走った。

「ああ——そうだったね」

居住まいを正した御都部は、長い前髪を梳き上げると、

「君が……相変わらず美しいものだから——、見惚れてしまってね……ああ、その目許——やはりお父上の血を受け継いでいるんだね——実に印象的だ」

灰皿を引き寄せると短くなった煙草を揉み消し、テーブルの上でその手を組んだ。

御都部が口にした『美しい』と言う単語に、つい鼻で嘲ってしまった僕は、年長者に対して大変失礼な態度を取ってしまったことに内心焦ったのだが、御都部は気にした様子もなく、

「実は——僕の……個人的な患者のことなのだけどね……」

何処か嬉々とした口調で話を始めた。

「親父が他界する半年くらい前に、突然やって来た患者なんだが——三年ほど前に、酷い怪我をしたと言ってね、色々な病院で治療を受けたらしいんだが——」

一旦言葉を切った御都部は、僕の珈琲カップを覗き込み『煎れ直そうか?』と聞いて来た。僕が首を横に振ると、

「——大きな病院を何軒も訪ねたそうだが、治療に満足がいけないと……怪我をしたのが顔だもんだからね、治療痕は出来る限り目立たなくしたいと——」

話を続けながらも、御都部は先ほどの扉がどうにも気になってしまうようで、そちらへ幾度も振り返るものだから、御都部が扉を窺う度、僕も倣うように扉へ視線を流した。

「——それで親父の噂を聞きつけて縋って来たんだね。僕の父は、特別な人工皮膚移植の技術持っているからね」

五年ほど前、形成外科医として『御都部』の名を世に知らしめた『人工皮膚移植』は、当初画期的なものとして囃されはしたが、特殊なプラナリアを使うその技法は、後に大変恐ろしい副作用の懸念があることが判明し、医療技術としての認可は下りなかった。

僕の父と御都部の父親が、その『副作用』を巡って度々口論していたことも思い出され、僕がその『非合法性』を口にしかけると、御都部は手を振って遮り、

「——なに……技術は総てに於いて発展、進化をするものさ。僕もあれから随分研究を

積んで来たんだよ——叩かれながらも密かにね」

不意に大きくあの扉を振り返り、小さく舌打ちすると、会話の途中で席を立つ非礼を詫びながらそちらへ向かった。

御都部の背中を見送った僕は、あの扉がまた少しこちら側へ開いていることに、やはり誰かがそこにいると理解^しった。

扉の中へ消えた御都部は仲々戻って来なかった。

僕は御都部の言わんとするところを推測すると、

——特別な患者に、特別な人工皮膚移植を施した……とでも言うのだろうか？

未だ認可の下りていない、非合法的な手段を使った『人工皮膚移植』が行われたらしい……のだが——

「それが僕と何の関係があるんだろう？」

思わず呟き唸り声を立ててしまった。僕は、只の歯科医で、腕もそんなに良い方でも無い。例えばその『特別な患者』の虫歯の治療でもしてくれないか？ なら分かるが、そもそも僕が出来る程度の治療なら、専門外とはいえど御都部の方が格段に鮮やかに処置出来そうだ。

歯科医師としての自分の不甲斐なさに思わず嗤いを漏らした僕は、扉の開く音を聞いて頬を引き締めた。

「失礼したね」

手に大判の封筒を持って現れた御都部は、元の椅子へ腰掛けざま、

「まあ——これを見て貰えば話は早いんだが……」

封筒の中身を慎重に取り出し、テーブルの上へ乗せた。

それは、大学ノートよりも一回りくらい大きな、数枚の写真だった。

「これが崇祿^{たかね}——患者の名前だが……彼の元の顔だ」

手渡された写真には、年頃にして中学生くらいの少女の顔が写っていた。

「綺麗な顔……だろう？」

自分の『もの』でも自慢するその口振りに、

——なるほど、そう言うことですか。

と、僕はこの写真の美少女と御都部の関係を即座に理解したのだが、

——いや……まてまて。御都部は確か……『彼』と言ったぞ……

「えっ？ 男の子なんですか？」

西洋人形のように可憐な少女が、実は男子であるとのことに、驚きの言葉が口から飛び出した。

僕の感嘆に、満更でもなさそうに、御都部はフン——と鼻を鳴らした。

「——で、これは、崇祢がここへ来た当初のものだが……」

新たに取り出された写真を手渡された僕は、息を呑むと、それを注視した。

「——なんて……酷い——」

選ぶ間もなく言葉が口を衝いて出てしまった。

「どうしてこんな……事故ですか？」

可愛い顔の上へ、縦横無尽に走る引き撃れた傷跡に、疑問を覚えて尋ねていた。

「酷いものだよ——」

御都部は、憂いを含んで尚のこと優美な顔を俯向けると、重い溜息を吐き、

「うちへ来るまでに、幾度か手術を受けたらしいのだが、それが精一杯だと申し渡されたそうさ。これじゃあ余りにも気の毒だろう？ 元が美しいだけに……哀れだろう？」

喉を震わせ嘆く御都部の言葉に頷き、僕は激しく同調し、

「……これ、左の眼球も損傷したんですか？」

写真の少年の眼帯に指先を向けた。

「これが——手術を受ける前の、今から五年ほど前の崇祢なのだが……」

僕の問い掛けには答えず、御都部は薄紙で覆われた写真を差し出した。

躊躇いながら受け取り、御都部の顔を伺うと、落胆した人の様に項垂れた御都部は、小さく頭を振りながら吐息した。

そんな彼の様子に恐々覆いの紙を捲り、それを目にした途端、僕は不覚にも叫び声を上げ、顔を背向けてしまった。

言葉を失い動揺に視点を揺らした僕へ御都部は『落ち着いてくれたまえ』と笑った。

——何だ？ 今のは……

一瞬目にしただけのそれは、僕の目に残像として貼り付き、脳に焼き付いてしまったかのようだった。

それは、とても人の顔とは思えないものだった。

顔に負った傷の酷さも然ることながら、眼球を失ってぼっかりと口を開けた空洞の暗闇に、底知れない怨念めいたものが漂って思えた。

もし、『一番恐ろしく醜いものを描いて下さい』と問われ、これを見ていたら迷うこと無くこれを絵に描くだろう……と言うような――

僕は激しい喉の渇きに喘ぎ、誰かに急かされるように冷め切った珈琲を喉へ流し込むと、珈琲の苦さがじわじわと胸に染み渡るのを不思議なほど克明に感じた。

「――崇祿は……中学へ上がる頃、小さな港町に住居を移したそうでね、あの容姿だろう？ 町中の評判になったらしい――」

言葉を切った御都部は、空になった僕の珈琲カップを気に掛け、カウンターへ向かうと珈琲サーバーを持って戻って来た。

「評判になるほどの美貌だから、志の良くない男に目を付けられたんだね。……いや、そいつは隣りに住んでた男だったから、崇祿は運が悪かったのか」

僕のカップに熱い珈琲が満たされ、部屋中にその馨しい香りが広がったが、この部屋の澱んだ空気を一瞬誤魔化しただけで、この部屋は、やはり僕にとっては居心地の悪い空間でしか無かった。

「悪い男でね――」

一言吐き捨てた御都部は、薄紙を被せた写真だけを封筒へ戻した。

「嫌がる崇祿を、神社の祠へ頻繫に連れ込んで――性的な虐待をしたそうだよ」

御都部の口許が奇妙に歪み、僕はそこに彼の苦悩を感じた。

話の聞き手に徹した僕が黙って相槌を打つと、

「崇祿は、恥ずかしくて誰にも打ち明けられなかったんだな。だからそいつの悪戯がエスカレートして行き、崇祿はとても堪えられない要求を向けられ……分かるよね？」

語尾を囁きに変えた御都部はまたあの扉を窺い見た。

「^{いよいよ}愈々我慢ならなくなった崇祢が抵抗すると、そいつは酷く怒り出したそうだ」

珈琲を口に含んだ僕は、飲み下す瞬間に下品な音を発ててしまい、羞恥を咳払いで量かした。

「——それで、殴り衝けられ、顔を切り刻まれ.....あんな化け物のような顔にされてしまった」

今にも泣き出しそうな御都部の様子に、僕は困惑していた。^{おとな}穏しく話に耳を傾向けていたのだが、やはり、何故僕にそんな話をするんだろう？　と言う思いが強かったからだ。

写真をしまった封筒をテーブルの隅に置いた御都部の手は、怒りの行き場が無いように震えていた。

「何とも酷い話ですね.....」

他に言葉も見付けられず眉を寄せると、御都部はゆっくり頷いた。

「崇祢は恥ずかしい思いをして、それだけでは無く、こんなに酷い仕打ちを受けたのに、その男は精神を病んでいると.....その逃げ道を使ってお咎めなしさ——」

忌々し気に吐き捨てた御都部は、テーブルの上へ置いた拳を握り締めた。

「じゃあ.....その男は——」

僕が結末に中りを付けると、

「五年前、病院送りになったよ」

御都部は、重苦しくため息を漏らした。

「崇祢はね、今でも時々夜中に泣き叫びながら目を覚ますんだよ。あの男の幻影も見るそうさ。よほど怖かったんだろうね」

言葉を切った御都部は『あの扉』へ顔を向け、それに倣って僕が視線を向けたことを知ると、苦笑を漏らした。

背筋を伸ばして柱時計へ目を遣ると、間もなく四時という時刻だった。薄いカーテン越しに届く陽の光も勢力を失い、只でさえ暗い御都部の表情に黒い影を落としていた。

僕は御都部の話を聞いている内に、会ったことも無い『崇祢』と言う少年に深い同情を寄せていた。

西洋人形のように綺麗な顔を持った少年が、気狂い男に付け狙われ、辱しめられた拳

句、その美しい顔を切り刻まれて泣き寝入りだ。ズタズタにされたのは、顔だけじゃなくて、深刻なのは心の方だったろう——。

(可哀そうだ.....)

もし、自分の身に起こったとしたら.....人生も狂ってしまうだろう.....

そんなことを考えながら、ゾクリ——と身を震わせると、柱時計が午後四時を告げる鐘の音を響かせた。

「——崇祢は辛いばかりだったろうね.....結局法律だって、何も解決してはくれなかったんだ」

僕の心中を察したように、御都部が白く嗤った。

「でもね、崇祢はここへ——僕の処へ来て正解だったよ。心の傷までは癒せなかったけれど.....見てくれ、こんなに綺麗になったのだから——」

テーブルの上を滑って来た写真へ反射的に身構えた僕は、それに怖々目を当てた。

「——これは.....」

後の言葉も継げず写真を手に取った。

それに写った少年はまるで別人だった。

左眼の眼帯は痛々しく有ったが、パッと見て傷跡も殆ど目立たず、一番初めに見せられた写真の時依りも、血色が良く美しく感じるくらいだ。

(これが御都部の人工皮膚移植法——)

僕はその技術に感服すると、御都部に羨望の眼差しを注いだ。

(——ああ、そうか.....)

この時になって、やっと僕は自分が此処へ呼ばれた理由が判った。

御都部は、天才と讃えられた父親から引き継いだこの『特殊人工皮膚移植法』の成功を、僕に見せ付けたかったのだ。

本当なら、『悪魔の技法だ』とまで非難を向けた僕の父親に見せたかったんだらうけれど、その父はもうこの世にいないんだから、一人息子の僕に見せたかったと.....そう言った処か——。

「素晴らしい、本当に素晴らしいです御都部さん」

素直に滲えた僕に、口許を綻ばせた御都部だが、

「しかし——この左眼は……失ってしまった物はどうしても無くてね」

表情を翳らせると、溜息を着いた。

「腕の巧技師に頼んで、何個も義眼を創らせたんだが——崇祢はどれも気に入らないと言
うんだよ」

落胆したような御都部の言葉だが、その裏側に崇祢と言う少年への異常な愛情が窺え、
御都部の執心振りに僕の頬は歪んでしまった。

「仕方がないから、僕の左眼を上げたんだが……」

奥歯に物が挟まってでもいるように呟いた御都部が、緩慢とサングラスを外すと、左
側の瞼蓋が不自然に大きく凹んでおり、息を吸い上げた僕が上体を後ろへ退くと、小さ
く声を発して嘲われた。

「こんなのじゃ嫌だ——ってね、踏み潰されてしまったよ」

整った顔に一つだけ残った切れ長の目を細め、御都部は陽るく笑って見せたが、僕に
は床を転がった眼球が踏み付けられるグシャリ——、と言う音が聞こえて来た気がして、
吐き気を催し手掌で口を押さえた。

「自分の眼が戻らないなら、もっと『美しい眼が良い』なんて啼くんだよ——」

四肢にじわじわと忍び寄って来た違和感に激しく戸惑い、僕は細かく瞬きを打ち頭を
振った。

「……が、欲しい——ってね……」

身体を襲った異常に気を取られ、御都部が早口で呟いた言葉の冒頭を聞き逃してし
まい、

「——え……？」

喉を震わせ訊き返すと、北側の壁へ顔を向け、そこにピンナップされている僕の写真
を指差した。

「君の写真を見た崇祢は、美しい君を大層気に入ってね、この間君に会って……崇祢は
僕の車の中から見ていたんだが、実物を見たことで、欲求が抑えられなくなったんだな

——」

宵闇の迫った薄暗い部屋で、不気味なほど映える白い歯を見せ笑った。

「……あの『眼』が欲しい……って言うんだよ」

グラリ——と揺らいだ身体を、テーブルに手を着いて支えた僕は、必死で目を^{みひら}睜開いた。

「いや、僕もそれは駄目だと言ったんだよ。君は大切な友人だし、片側だけその、^{はしほみいろ}榛色の瞳では……可笑的だろうと——」

目の前にいる筈の御都部の声が、僕には何故か後ろから聞こえて来た。

「……でも、どうしてもあれが良い、欲しいと言うんだ。——判ってくれるね？　僕は、崇祢に嫌われるのが一番辛いんだよ。彼はこの僕を、愛してくれる人だから……さ」

迫って来た御都部から、懸命に逃れようと身を振った僕だが、意識は辛うじてあるものの、既に足腰の立つ状態に無かった。

「お互いに親を亡くし——君は日本に身寄りも無いだろう？　寄り添って生きて行こうじゃないか——」

テーブルへ縋り着いた僕は、必死と口を動かし御都部を非難した。けれど、それは声にはならず、喉の奥で微かな悲鳴が発っただけだった。

「なに、命まで^と奪ろうでは無いんだよ。崇祢は君を気に入ってるからね」

ガタガタと身を震わせた僕を、哀し気に^{みつ}瞞めた御都部がそっと手を伸ばして来た。

「僕と崇祢と君の三人で——きっと楽しく暮らして行けるよ——」

御都部の手が頬に触れた瞬間、僕は声にならない絶叫を上げた。

「済まない……ね——」

接近して来た一つだけの瞳には言いようのない狂気が潜んでいた。

僕の身体は大きく揺れ、視界がスローモーションを見る速度で斜めに傾ぐと、視線の先に開け放たれたあの扉が見え、その傍らには手脚のスラリ——と長い少年の姿が有った。

少年の顔は真っ直ぐに僕へ向けられていた。やはり左眼は失われたままの虚ろで、瞳孔には虚無が渦巻き、その瞑闇は僕を捉えると、突然強い意思を持ったようだった。

抗う術も無く、静かに瞼蓋を下して降参すると、忍び寄って来た闇の果てから、御都部のものとは異なる甘い声音が響いて来た。

それが崇祢と言う少年のものだと察した処で、僕の意識は白く霞んで闇に飲み込まれて行った。

《お わ り》

腐蝕の闇・innocent

著 久遠 瀧耽

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
